

送辞

厳しい寒さがまだ残りつつも、日差しに春の訪れが感じられる季節となりました。このような佳き日に、先輩方が晴れてご卒業を迎えられましたことを在校生一同、心からお祝い申し上げます。希望を胸にこの甲斐清和高等学校の門をくぐってから早3年、かけがえのないさまざまな思い出が、先輩方の胸に駆け巡っていることと思います。

先輩方と出会って2年になります。初めてお会いした、私たちが入学したころのことを、ついこの間のように思い出します。これから始まる高校生活、私は緊張や不安でいっぱいでした。しかし、そんな私の目に映ったのは、温かな笑顔の、まっすぐな瞳を持った先輩方の姿でした。「高校生活を送っていけば、私もこんな風に笑えるようになるのかな」、そう思ったとき、重かった心がふっと軽くなるのを感じ、「希望」という光を、先輩方の姿に見出すことができました。

私はなにごとにおいてもゆっくりで、慣れるまでに時間がかかる方です。そんな私に、先輩方はどんなときでも、初めて会った、あの春の日差しのように温かく接してくれました。「できない」「分からない」とこわばっていた私の心は、ゆっくりとほぐれていきました。部活動、そして生徒会。先輩方の中で活動することは、本当に心地の良いものでした。その輪の中に入れることができ楽しくて仕方ありませんでした。つまずくと、なかなか次へと一步を踏み出せない私。ひとりだったら、諦めていたこともたくさんあったでしょう。けれど、先輩方はいつだって温かな笑顔と共に、うずくままの私に手を差し伸べてくれました。そして、たくさんの時間を共有する中で、そのまっすぐな瞳が見つめる風景を隣で、一緒に見ることができました。後輩ができ、生徒会長となって、初めて気がつきました。そうやって、一つひとつ経験を積んで、育っていけるように、いつだって寄り添い、見守ってくれたのだということを。

そう、先輩方の、なにごとも温かな心で、まっすぐに向き合う姿勢。その凛々しく美しい立ち姿を、私はずっと見つめきました。清和祭、球技大会などの学校行事。また、学業や検定、そして部活動での苦しい練習。この3年間は決して順風満帆な日々ばかりではなかったはずです。しかし先輩方は、お互を思いやり、輝かしい明日を見つめ、努力を続けてきました。先輩方はこれから、どのような道を歩んで行くのでしょうか。困難な壁が立ちはだかり、心が折れてしまいそうになることもあるかもしれません。そんなときは、笑ってみてください。笑顔には、明るい気持ちになったり、気持ちを楽にしたりする効果があるそうです。辛いときこそ、少しでも口角を上げてみてください。私たちに何度も勇気をくれたあの温かな笑顔を、思い出してください。厳しい雪の寒さの中でも、温かな光を放つ一輪の梅の花のような、何事にも負けないその笑顔が今度は、先輩方自身にエールを送ってくれるはずです。

先輩方と、この学び舎で過ごすのは、今日で最後になります。

お世話になった先輩方が卒業してしまうのは、正直言って本当に寂しいです。ですが、未来に向かって希望を胸に歩き出す姿を、「かっこいい」と心から思っています。自分自身の道を、まっすぐに切り拓いていく先輩方。入学したときから見つめているその「希望」という光を見失わないように、私たちも頑張っていきたいと思います。

先輩方、本日は本当におめでとうございます。

最後に卒業生の皆様のご健康と、さらなるご発展を心よりお祈り申し上げ、在校生代表の送辞とさせていただきます。

令和2年3月1日

在校生代表 杉山めぐみ

答 辞

「初春の令月にして 気淑く 風和らぎ 梅は鏡前の粉を披き 蘭は珮後の香を薰らす」万葉集のこの序文から採った新元号「令和」初の卒業生として、私たち、179名は、今、ここに立っています。

本日は、ご来賓の皆様をはじめ、先生方、在校生の皆さんに見守られながら、このように厳粛かつ盛大な卒業式を迎えたこと、卒業生を代表して、心から御礼申し上げます。

さまざまな思いを胸に、本校の門をくぐった三年前。真新しい制服は、私たちに期待と緊張感を与え、高校生活の始まりを実感させてくれました。モデルチェンジした新しい制服とは違う、この制服も、私たちの卒業と同時に、街中で見掛けることもなくなると思うと、少々寂しい気持ちが致します。

月日が流れるのは早いもので、仲間と出会い、過ごした思い出が、まるで昨日の事のように感じます。

中学校とは違う専門性の高い授業。様々な分野で活躍する部活動や、活気あふれる清和祭、球技大会。中でも、初めて経験した、海外修学旅行。音楽科は音楽の聖地であるウイーンへ、私たち普通科は人気の高い台湾へ行きました。全クラスが海外修学旅行を経験するというは、本校始まって以来、初めてのことでした。そして、170名以上の規模で台湾への修学旅行を実施したのは、山梨県内でも例を見ないと聞き、なんだか誇らしく感じました。異文化に触れ、外から観る日本に新たな発見をしたり、内省したりする貴重な経験でした。三年生になると、進路獲得のため、面接練習や小論文、受験勉強へと気持ちを切り替えました。「書けない」「答えられない」「進路が決まらない」と苛立ちながらも、私たちは先生方の指導のもと、ひたすら練習を重ねました。こうして、高校生活を振り返ると、試験に挫折しそうになったり、周囲の人に迷惑をかけたり、衝突したこともありました。しかし、共に寄り添ってくれた仲間や多くの人とふれあった経験が、私たちを何倍にも成長させてくれました。

私は、この甲斐清和高校で、最高の仲間たちに出会いました。くだらない話で盛り上がったこと。友人関係の悩みについて、何時間も話し合ったこと。仲間と過ごしたすべての時間こそが私たち一人ひとりのかけがえのない宝物です。本当にありがとうございます。

そして、先生方。先生方はいつも私たちを正しい道へと導いてくださいました。常に生徒一人ひとりに気を配り、些細な変化も見逃さず、そっと声を掛けてくださったこと。時には渾身の力で厳しく指導してくださいました。楽しい時も辛い時も、常に寄り添ってくださったこと。先生方の温かさがこの学校のあちらこちらに溢れていました。心から感謝しています。ありがとうございました。

私たちが一番感謝すべきなのは、家族の存在です。送り迎え、毎日のお弁当、部活動の応援。私たちはそれを当たり前のように思い、甘えて我儘や不満をぶつけたこともあります。しかし、どんな時でも、私たちの決めたことを尊重して、背中を押してくれたおかげで、私たちは、今日、この場に立っています。改まっていうのは恥ずかしいけれど、この場を借りてお礼を言わせてください。今まで育ててくれて、本当にありがとうございます。精一杯の「ありがとうございます」を返せるように、これから自分の夢へ向かって頑張っていきます。これからもきっと、迷惑をかけることがあるかも知れないけれど、私たちのことずっとずっと温かく見守って応援してください。

「平成」という一つの時代が終わりを告げた今、私たちは、令和初の卒業生として、社会へ歩みだそうとしています。東京オリンピックを間近に控え、社会のグローバル化やICT化が進む中、これまで以上に柔軟な思考力や慎重な判断力が求められることでしょう。しかし、我々が向かう社会は、新型コロナウィルスの感染拡大やテロの脅威といった問題が山積みで混沌としています。アルベルト・aigneauは「困難の中に、機会がある」という言葉を残しています。私も、困難だと思った時こそ、自分が成長する機会、新たな発見をする機会、何かを達成する機会だと思い、挑戦を続けていきたいと思います。

生徒会長の杉山さん、先程は、心温まる送辞をありがとうございました。残念ながら、在校生の皆さんに見送っていた大切なことは叶わなかったけれど、こう伝えてください。今度は皆さんに伝統を引き継ぎ、新たな歴史を刻んでいってくださいと。応援しています。

最後になりましたが、本日、ご臨席を賜りました皆様のご健勝とご多幸を祈念し、答辞といたします。

令和二年三月一日

卒業生代表 鈴木望愛